
東方夢幻操

ソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢幻操

【Nコード】

N5691X

【作者名】

ソル

【あらすじ】

幻想郷、それは東方好きなら誰もが行きたいと思う素敵な楽園。

その幻想郷に一人の青年が幻想入りしてダラダラグダグダと生活する、そんな話・・・

主人公情報（前書き）

能力ネタバレあり

それと能力説明が少し無理矢理感がある（汗）

変な所があれば指摘してくれると助かります

主人公情報

名前

芳乃 勇氣 (よしの ゆづき)

年齢

18

種族

人間

能力

夢幻を操る程度の能力

主人公説明

東方大好きな典型的(?)な東方厨

現在進行形で絶賛二トな野郎、能力が発現してからそれはますます酷くなるダメ人間街道まっしぐらな奴

よく心の中や現実で一人ポケッツコミをしている端からみたら大変頭がアレな奴

好きな東方キャラはフラン、橙、藍、椀、お隣など獣っ娘多め

能力説明

簡単に説明するとアニメ、ゲームの能力や技、自分で考えた能力や技などを創造したり操ったり出来るといってテンプレなチート能力

だが主人公は基本的に楽に生活するために使っている

まさしく宝の持ち腐れである

第1話：いきなり！幻想伝説

・・・・・・・・ドシャ！

「ぐはぁ！？」

いきなりの全身を襲う痛みに寝ていた俺は跳ね起きた

「ゲホツゴホツ・・・一体何だよ・・・ってここどこ！？」

起きた俺の視界に写るのは木、木、木・・・360度どこを見ても木
どう見ても森です本当にありがとうございましたw

「っじゃねーよ！何で起きたらこんな所に居るんだよ！？何、紫の
神隠しで幻想入りとか？あつたらいいーね」

ねーよww

しかし昨日はちゃんと自分の家の布団で寝たよな？

なのに何で起きたら森に居るんだよ、さっきの痛みで夢じゃない事
は分かるんだが・・・てかまだ痛え（泣）

「しかもまだ夜じゃん」

そう辺りは真っ暗、周りも5メートル先が暗闇に包まれて見えない
まさにお先真っ暗

「誰が上手い事言えと・・・しかしどうするか」

俺がこの先どうするか考えていると

「わは、人間が居る。あなたは食べてもいい人間？」

・・・は？

突然ルーミアみたいなセリフが聞こえたので声の方に振り向くと

「・・・え？・・・は？」

「わは、」

ルーミアが居ました・・・

第2話：ルーミアとの口涉戦（笑）

「わは」

「・・・え？ルーミア？」

いやそんな馬鹿な

でも外見ルーミアまんまだしコスプレとかでもここまでソックリなのが居たらネットで一度くらいは話題になってるだろうし

「・・・まさかの本物？」

だとしたらここはまさか・・・!？」

「なあ、ここは幻想郷・・・か？」

「？そうだよ、ここは幻想郷だよ。ところでお兄さんは食べてもいい人間なのか？」

7

確定、ここが幻想郷で目の前の子がルーミアだと

・・・それと同時に俺の命の危機ということも（汗）

ヤベエどうしよ、とりあえず口涉（誤字にあらず）で何とかしよう・

「あゝ食べるのは止めておけ、俺ゴミみたいな味するみたいだから食っても不味いし腹壊すぞ」

「そーなのか、じゃあ食べないのだ」

ふう、何とか口涉成功、ルーミアがアホの子で良かったぜ

「よし、それじゃルー・・・あんたの名前は？俺は芳乃勇氣」

あぶねえ、うっかりルーミアの名前言いそうになったわ
一応幻想郷の事は知らないフリしとこう。さっきここが幻想郷か聞
いちまったが多分大丈夫だよな（汗）

「私？私はルーミアだよ」

「じゃあルーミア人里ってどこにあるんだ？」

「人里はあつちの道に出てあつちに真っ直ぐ行けば着くよ」

「そうか、ありがとな。それじゃ俺は行くから」

「そーなのかー、それじゃあバイバイなのだ」

「ああ、またな」

俺はルーミアに礼を言い教えてもらった道を歩き始めた・・・

第3話：能力覚醒（前書き）

サブタイでネタバレｗｗ

第3話：能力覚醒

ザッザッザッ・・・

「しかし本当にここは自然豊かで良いな」

俺は今ルーミアから教えてもらった人里への道を歩いている

「んー、少し急いだ方がいいか、まだ夜が明けてないから他の妖怪が出るかもしれない」

と、俺が歩みを早めた時・・・

『グルルルル・・・』

前方に狼の妖怪が3体ほど、気付けば後ろにも3体・・・
計6体の狼妖怪の群れに包囲されていた

「フラグでしたか、そうですか」

コンチクシヨウ今日は厄日か！！

本日二度目の命の危機

さて、どうするか

戦う

口渉

逃げる

戦う、無理だww

口渉、ルーミアと違い今回は話を通じない
逃げる、包囲されてるから逃げられない

・・・あれ、これ詰んだ？(汗)

「グガア!!」

「うわぁ!?!」

ヤバいあれこれ考えてたら向こうから襲ってきたー!!
それを合図に他の奴らも襲ってきた!?!

「うおわぁ!のわぁ!にゃあー!?!」

奇声を発しながら狼達の攻撃を何とかかわしていくが

ガッ

「あ痛っ」

コケた・・・;;;;

もちろん狼達はその隙を逃さない

俺に食い掛からんと一斉に飛び掛かってくる

「あ・・・」

その瞬間周りの時間がスローになる

そして産まれてから今までの記憶が一気に蘇ってくる

・・・これが走馬灯か・・・

ぶっちゃけ昔の記憶なんて興味無いが(笑)

そして走馬灯が終わりもうすぐ狼の口が俺の体を食い干切らんとその大口を開けた時

夢幻を操る程度の能力

ふと、頭にそんな言葉が浮かんできた

そして俺は自然とその能力を使っていた

「『結』!!」

その瞬間俺の体の周りが正方形の結界に囲まれた

『ギャン!!!?!?』

飛び掛かってきた狼達は当然結界にぶち当たり地面にズルズルと落ちていった

そして俺は

「おお〜う・・・」

周りの状況を見て呆然としていた・・・

第4話：戦闘？何それ食えんの？（前書き）

やはり短い・・・（汗）

感想とかアドバイス待ってますm（| |）m

第4話：戦闘？何それ食えんの？

前回のあらすじ！

やせいの おおかみのむれ が とびだしてきた！

ニア にげる

にげられない！

おおかみのむれ の こうげき！

ゆうき は こうげき を かわした

能力覚醒！ 今ここ

.....

「・・・今なら行ける！！」

正気に戻った俺は結界を解除し妖狼達に突撃して・・・

そのまま脇を通り駆け抜けていった

「能力ゲットしたのは嬉しいがまだ使い方がよく分からんから逃げ
る！！・・・という訳であばよとっつぁん」

ゆうき は にげだした・・・

森の出口

「ふう、何とか逃げれたな」

森の出口までそのまま走りきった俺は道の小脇にあった岩に座り休んでいた

「しかし夢幻を操る程度の能力か」

さっきは咄嗟に結界を貼ったがつまりはそういうことなのか・・・？

ズキツ！！

「痛っつ！！」

何だいきなり頭痛が！？って何だこれ、能力の使い方？

なるほどテンプレ乙

だがこれで勝る！！

何にだよw

「というか頭がメチャ痛てえ〜！！！！」

∴ 少年能力情報取得中∴

「ふう、やっと痛みが引いた・・・」

しかしなるほどこりゃチートだな、自分で考えた能力とかも使えるのか

・・・二度目になるがテンプレ乙

「てか能力の名前と中身が合っていない気がするが・・・」
突っ込んだら負けですかそうですか

「よし！能力の使い方も分かったし体調も回復したからそろそろ行くか」

朝日も完全に上ってるし少し急ぐか・・・

・
・
少年移動中
・
・

第5話：俺、金無し、人里にて。（前書き）

4時間掛けて書いたのにたった2000文字・・・
やっぱり長文書くの苦手だなあ・・・

第5話：俺、金無し、人里にて。

人里

「やっと着いた・・・」

人里に着いたのはもうすぐ太陽が真上に行く頃だった

「とりあえずどっかの茶屋で休憩を・・・金無いじゃん・・・」

俺が人里の真ん中で頂垂れてると

「おい君、大丈夫か？」

人里の人が心配したのか声を掛けてきた

「ああ大丈夫です、ちょっと無情な現実に絶望してただけですから
そう答えて声の主を見る

「？よく分からないが大丈夫そうだな」

声の主は慧音先生でした

まあ何となくそんな気がしてたけど

「ところで君はここでは初めて見る顔だが外来人なのか？」

「ああはい、そうみたいです。初めまして芳乃勇氣っていいます」

「おっ近頃の若者にしては礼儀正しいな。私は上白沢慧音だ、この

人里の守護者や寺子屋の教師をしてる」

よろしくと手を差し出してくる

こちらこそと返して握手をする

「それで勇気はこれからどうするつもりなんだ？外の世界に帰りた
いなら博霊の巫女の所に行けば帰れるぞ」

「いや、外の世界に帰るつもりは無いです。これからこっちで暮ら
すつもりです」

「そうか、外の世界に未練とかあるんじゃないか？家族も心配する
だろう」

「まあ、未練は一応はありますけどそれがどうでもよくなる位この
世界はいい所ですから。家族に関しては・・・まあ何とかあります
よ」

「何とかなるって、ハア…まあいい。ところでこっちで暮らすとは
言ってたが住む所はあるのか？」

そういえば・・・

「慧音さん、こっちら辺に空き家って無いですかね？」

「そんな所だろうとは思ってたが、残念ながら今は人里には空き家が
無いんだ」

あらら・・・(汗)

「そうですか、じゃあこれからどうするかな・・・」と、その時

…グウ…

周りに聞こえるくらいの音量で腹の虫が鳴いた
無論俺のだ…

やっぱり周りにも聞こえたのか微かに笑いを堪える声が聞こえる
うわぁ、恥ずい…／＼／

「ククク…何だ腹が減ってるのか。そういえばもう昼だもんな、よし蕎麦屋で昼飯にしようか…クフッ」

慧音さん、あなたもか…（苦笑）

「でも俺金持ってますんよ？」

「そんなこと分かっている、昼飯くらい奢ってやるから安心しろ」

「いやでも流石に初対面の人に奢ってもらうのは悪いですし…
言ってる思ったがそういえば初対面だったね、一応元から一方的に
知ってるからそんな感じがあんまり無かったな（苦笑）」

「そんなこと気にするな。いいから人の厚意は素直に受けとる」

「あ…はい、分かりました。ありがとうございます」

分かってたけどやっぱり慧音さんいい人だ…（涙）

「よろしい、それじゃ行くつか」

…少年少女移動中…

蕎麦屋

「おつ慧音さんじゃないか、いらっしやい！」

「こんにちは店主、席2つ空いてるかな？」

「おう、丁度その席が空いた所だ。注文が決まったら呼んでくれ」

「ああ、ありがとう」

「流石に昼時だから混んでますね」

「そうだな。まあここは人里でもかなり美味しい店だから人気もあるし私もよく来るんだ」

「へえ〜そーなのかー・・・」

「で、何を食べるんだ？私は天ぷらそばだな」

「じゃあ俺は・・・掛け蕎麦で」

「ん、掛け蕎麦でいいのか？こっちの山菜そばも美味くてオススメだぞ」

「あ、うん・・・それも食べてみたいですけど今日は掛け蕎麦でいいです」

「そうか。店主注文いいか？」

「はいよっ!」

…少女注文中…

「へいお待ちっ!天ぷらそばと掛け蕎麦ね!」

「ああ、ありがとう」

「おう、美味そう・・・」

「さて、それじゃ食べるか」

「そうですね」

「「いただきます」」

ズルズル・・・

「おお、めっちゃ美味え・・・!」

「ふふっ、だろう?」

「兄ちゃん嬉しいこと言ってくれるねえ!そう言ってもらえると作った甲斐があるってもんよ!」

「あ、店主さん。これ本当に美味しいです!一発で気に入っちゃいましたよ」

いやこれは本当に美味しい・・・

「そうか、気に入ってもらえて良かった。まあゆっくり食べていけ

よ！」

そう言って店主は奥に戻っていった

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふう、ご馳走さま」

「ご馳走さまでした」

いやあ〜美味かった。あれから一言も喋らず黙々と食べてたからな
〜（笑）

「さてと、店主会計を頼む」

「おう、慧音さん今日は俺の奢りだ」

「えっ!?! いやいやそれは悪いよ。でも何故?」

あれ?なんかデジャヴ

「何、兄ちゃんに美味いって、気に入ったって言われて俺は嬉しくてね。だから今日は俺の奢りだ」

「そうか。それならお言葉に甘えて、ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

「おうっ! 兄ちゃんもまた来てくれよ!」

「はい、絶対また来ます!ご馳走さまでした!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、勇気はこれからどうするんだ?」

「何がです」

「何って家だ、家」

「あ……」

完璧に忘れてた(汗)

「ハア…それじゃ」

……それじゃ私の所に来る？……

「え？」

後ろから慧音じゃない人が声を掛けてきて振り返ろうとしたら

フワッ

と浮遊感がして咄嗟に下を向くと足元にスキマが広がっていて

「うおおあゝ!?!?」

俺はそのスキマに落ちていった……

第5話・俺、金無し、人里にて。(後書き)

これ書いてたら蕎麦食いたくなってきた(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5691x/>

東方夢幻操

2011年11月9日02時08分発行